

# 天馬の記

岡部耕大 ③

原節子の微笑みは高根の花の微笑みであった。遠くから眺めているしかない微笑みである。

近年、原節子に関する著書でそうでもないことは知ったが、それでも高根の花である。原節子が作ったカレーライスをもらつて、縁側で食ったカメラマンの話にはちよつと嫉妬した。私は小津作品の原節子が好きである。安心して任せている雰囲気

和子姉さんが祖母と語っている微笑みもそれであった。少年時代の私は嫉妬した。祖母は心からうれしそうだった。そう、嫉妬心と劣等感が私の武器である。有名大学の法科をトップで卒業した男を知っているが、そんな大切な年に親父とおふくろはなにをやつてたんだ」。私の歳はもつとも同級生が少ない年である。時代はまだ牧歌的であった。庶民派でデビューした女優の吉永小百合さんが同じ年の生まれと知つてうれしくなつた。優の吉永小百合さんが同じ年の生まれと知つてうれしくなつた。やっぱり俺とは違つ」。またう

## 小百合さんと遭遇

の男にも嫉妬心と劣等感があった。野球がうまくなかった。プライドはあつたが、運動神経はなかつた。人間、だれもが嫉妬心と劣等感で固まっている。それと、闘争心。

私が生まれたのは「本土決戦」が取沙汰された年である。「そ



おかべ・こうだい 1979年に「肥前松浦兄妹心中」で岸田戯曲賞を、89年に「亜也子」で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。日本劇作家協会元理事。松浦市で毎年、子供たちにミュージカルを指導している。川崎市在住。70歳。

ことがあつた。確か、西田敏行さんの芸歴30年の記念パーティーだった。大勢の有名人が集まつていた。「すごいな。これで吉永小百合でもいたらな」とつぶやいたら、前にいる女性がくるつと振り向いた。啞然とした。吉永小百合さんだった。小百合さんはにこつと微笑んだ。憧れの人の微笑みであった。私は俯いて、両手の親指と親指を絡ませるしかなかった。私も立派なサユリストだったのである。

中学時代、吉永小百合はトイレに行くのか行かないのかで口論になり、殴り合いの喧嘩になつた同級生がいた。まだ小百合さんの朗読を聞いていないのが恥ずかしい。(松浦市出身)